

序

藤原宮跡の発掘調査では、藤原宮の造営時に開削された運河を中心に、馬や牛をはじめとする動物遺存体が出土しています。これらの動物は、造営資材の運搬などに利用されたものと考えられます。

奈良文化財研究所は、平成22年から25年にかけて、東京大学と連携して藤原宮跡出土の馬骨・馬歯の同位体分析を実施しました。その結果、藤原宮跡出土の馬の多くが東日本の内陸部で産まれた個体であること、同時に、馬に与えていた飼料に多様性があったことなどが明らかになりました。これらの成果と、史料から知られる古代の牧や馬の利用に関する規定などを総合することで、古代の馬生産や馬の資源利用に関する研究がより深化するものと期待されます。遺跡から出土する動物の骨や歯から、その産地や飼育環境の解明に迫る手がかりが得られる見通しが立ったことは重要です。

そうした学際的な連携研究の成果を、ここに報告書としてまとめることにしました。本報告書が動物考古学や環境考古学はもちろんのこと、広い分野の研究に活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、本連携研究の実施や報告書の作成に際しまして、多大なご協力をいただきました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成28年3月

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
所長 松村恵司